

書 評

『「神話」を近現代に問う』植朗子・南郷晃子・清川祥恵編（勉誠出版、2018年）

決然とした、しかし悠々たる嚆矢

平野 惟

Yui HIRANO

SNS のトレンドに自分の好きなものの名前が出ていたりすると、みんなアレの良さにと
うとう気付いたかなどと考えてつい嬉しくなるものだが、最近では思わぬ肩透かしに遭う
ことが多い。シェイクスピアだのゲーテだの、あるいはギリシャ神話やアーサー王伝説の
騎士の名前を目にし、さては新しい手稿か文書でも見つかったかと色めき立ってリンク先
へ飛んでみれば、それはその名を名乗るソーシャルゲームのキャラクターに「覚醒」だか
「神化」だかの機能が実装されたというお知らせばかりなのである。この本の書評のお話
を頂いたのは、ちょうど北欧神話の女神ヴェルダンディがどこかで「獣神化」したという
ショッキングなニュースに触れ、一体今の世にとって神話とはなんぞや、と茫漠とした思
いに捉われていた頃のことであった。個々の論考については、編者の一人である清川祥恵
が過不足なく纏められている冒頭の「総論」を読むに如くはないので、ここではあくまで、
本書の構成とねらいに関して、評者が思うところを述べるに留めようと思う。

本書『「神話」を近現代に問う』は、国際文化学研究推進センター（Promis）において数
年来活動してきた神話研究プロジェクトチームが初めて発刊する研究成果である。しかし
ながら、満を持して放つ集大成というわけではない。いや、例えそう名乗っていたとて何
の不思議もない充実ぶりなのではあるが、植朗子や清川祥恵と共に編者を務めている南郷
晃子は、「あとがき」でこのように断言しているのである。

近現代の「神話」をめぐる豊かで複雑な問題を「国」や、ましてや研究者の専門の境
界に囚われず、議論していくことを私たちは今はじめたのである。近現代の「神話」
を問う行為を始め、問い続けることに決めた。本書はそのはじまりの書である。（255
頁）

神話や伝説というものには、すでに終わった過去のことのようでありながら、時機ある
ごとに息を吹き返して、われわれ一人一人の前にその都度新しく立ち現れてくるような
ところがある。こちらに知る気があるとなかろうと、それらは手を替え品を替えて人間の
前に現れては、また記憶され、再話されようとする。相手がそのようなものであるからに
は、こちらが生きる時代や話す言葉、所属意識だの知識の偏りによって孤立したままでは、
到底太刀打ちできるべくもないだろう。その意味で、「神話」を問うとは、絶えず再生して

くる相手に対して、何度でも挑戦の嚆矢を打ち続けることに他ならない。詳しくはもう少し後で述べるが、こと近現代における神話という問題を考えるにあたって、本書のこの「はじまりの書」との位置付けは非常に重要であると評者は考える。

本書は一般に神話を取り扱うことの多い文学や歴史学のみならず、社会学や教育学などより幅広い分野からの議論を収録することで、まずは意外に見落とされがちなこの神話の「再生」局面を漏らさず視野に入れたものになっていると言える。論考の間で相互の言及が（特に第1部と2部において）比較的多く見られるのも特徴であり、ともすれば閉鎖的との感を抱く向きもあるかも知れないが、「神話」を相手にするという上記の事情に鑑みれば、これはやはり強みの一つに数えるべきことだろう。展開される議論もまた、時に何の本を読んでいるのか分からなくなりそうなほど多様であるが、清川が冒頭の「総論」において提示している「人々によって特別な意味を持つものとして語り継がれる物語」（7頁）という絶妙な題材の定義のもと、読者はむしろその広がりの意味をこそ考えながら読み進めることができるようになってきている。なぜ近現代において、つまりは伝承の事実か否かが真剣に吟味・判定され、第二次大戦以降には一種の警戒感さえ向けられるようになったこの世界において、人々はなおも変わらず、あるいはより執着しさえしながら、これらの「神話」を語り続けるのだろうか？

そうした思考の補助線となるのが、本書の採っている三部構成である。神話の創出や伝播、誤解や利用、否定に再評価、芸術家による再創造あるいはオマージュ、果ては「過去は死なせてしまえ（“Let the past die”）」に至るまで、読者は本書の中で実に様々な神話史の側面を見ることになるが、15の論考と3つのコラムがそれぞれ「神話」の「誕生」——「近代」と神話学、「近代「神話」の展開——「ネイション」と神話を問い直す」、そして「神話」の今日的意義——回帰、継承、生成」と銘打たれた3つの章へと振り分けられていることから、読者の注意は自ずと、近現代において伝説・神話と人間の関わりが迎えた幾つかのターニング・ポイントへと向けられるだろう。すなわち、グリム兄弟やその協力者たちによる民間伝承の収集および体系づけの始まり、次にミュラーやタイラーらの神話解釈の試みから近代的学問ジャンルとしての「神話学」が成立し各国へ広がっていくまでの流れ、そして神話がナショナリズムとの結びつきにおいて政治的に利用された末に迎えた、現在の研究動向ばかりか神話そのものに対する人々のイメージにまで影響を及ぼし続けている第二次世界大戦の破局である。

もちろんこうした読み方は、第1・第2章の論考のほぼ全てがドイツ語圏と日本での神話学の経過に関するものであることに引きずられてはいる。いずれ続刊において他の国での、または国の他での神話学の勃興期の姿が描かれることは大いに期待されるが、少なくとも今回においては、神話研究がドイツ語圏と日本において隆盛し、その解釈利用が膨張し、一旦の破滅を迎えるまでの流れについて、やはり多くの頁が割かれて然るべきだろう。なんとなれば評者にとって、今日こんなにも生活の様々な面に表出している人々の神話への憧れは、むしろその否定的に語られる側面への逆張りとして生じているものではないかと思えるからである。

第二次大戦の終結以降、人々の夢想や盲信を孕んで無秩序に拡大しかねない神話イメージのあいまいさがつとに危険視される所となったことは間違いないだろう。そしてその一方で、史料批判を経て科学的に実証された「事実（ファクト）」の重要性は、相対的にいや

増すところとなった。しかし伝えられる出来事のどれが事実で何が虚偽ないし幻想なのかということの判断は、言うまでもなく膨大なエネルギーを必要とする。フェイクニュースはこの非対称性について量産されるからこそ、ああもたやすく事実に対して優勢となるのである。この傾向を突き詰めて考えれば、専門的知識やその分析のための時間を持たない一般人にとって、認定された事実の羅列からなる「正しい歴史」なるものは、ほとんど手の届かないブラックボックスのようなものとも見えてこよう。アーサー・C・クラークが科学技術と近代以前の世界における魔術との関係性について発した言を思い出しながら言えば、実証主義史学の成果は発達の際に、見る人の立場によってはほとんど神話と見分けが付かなくなりつつあるのだ。

もちろん「正しい歴史」を説くことなどは、歴史研究者の分を遥かに超えた所業である。しかし巷ではどうも、この世にはそれ自体で無謬である事実というものがあり、その連なりからなる「真実の歴史」が確固として存在するのだという理解が、おぼろげながらも通用しているように見える。例えば本書評の冒頭で見たとき、美男美女ぞろいの英雄たちや擬人化された武器の力を借りて戦うゲームの目的は、しばしば「正しい歴史を捻じ曲げようとする」勢力をくじくことである。ゲーム内でその守るべき歴史の正しさを担保しているのが「時の政府」であつたりするのに、評者などは何か薄ら寒いものを感じずにはいられないが、歴史なるものに対するそうした感覚は、既にかかなりの程度、現代の世界へ定着しつつあるのではないだろうか。主観でものを書く歴史家やメディアによって加工された形でしか自分の元には届かない、真実の歴史がどこかにある……書店で「教科書に書かれていない歴史」といった類の本を買い求める人々の間に漠然と共有されているそうした認識こそ、おそらくは再び魔術化された現代の神話とも呼ぶべきものである。

だから神話は胡散臭くて危険なものなのだ、と頭ごなしに考える人もまた同じ穴の貉である。神話をしかじかの神にまつわる物語というだけでなく、「人々によって特別な意味を持つものとして語り継がれる物語」として考えるならば、それはどうしたところでわれわれの生活から切り離したり排除したりできるものではないし、またそうすべきでもない。自分は何者でどこから来たのか、この世界は一体どういうものであるのか、今日の夜には何を食べるべきかといったことを考える限り、われわれは何事かを大切に、結果どこかしらの立ち位置に場所を占めずにはいられない。そうした人間ののうびきならなさは、やはり不完全にして非英雄的なわれわれの暮らしの中から紡ぎ出される、時にあやふやであつたり論理が通らなかつたり、時代によっては政治的に不穏当であつたりする物語によってしか掬い上げることのできないものであろう。その切実さを考慮せずに立てられる問いは、いかに明晰であっても決して人の心に光を当てることはできず、応答の見込めないものとなる。先にその歴史感覚をやや批判的に考察したソーシャルゲームにしても、そこは専門知識を持たないながらも（あるいは持たないがゆえに）「歴史の正しさは揺らぎやすいものである」という危機感を抱きながら生活している普通の人々に、擬似的にはあれその危うい秩序の維持に主体的に参加し貢献する体験を与える場であるのだと考えることもできよう。そうした自警団的な発想を大いに警戒しつつ、さりとは否定する気にもなりきれない評者などは、そこで南郷の「あとがき」における以下のくだりを読むにつけ、本書が『神話』を近現代に問うにあたって取っているスタンスの実に適切であることに気付かされるのである。

「近代神話」のプロジェクトチームの特色のひとつは、生活をしながら研究をするということに意識的である（意識的にならざるを得ない）点であろうと思う。[...]それぞれの家族や仕事を抱えながら、同時に研究をするということは、もしかすると多くの研究者にとって「当たり前」のことかもしれない。しかし苦しくなりすぎずにそれを行えるかどうか、ということはすなわち続けることができるかどうか、ということに関わってくる。うまく加減をして、生活をしながら研究をする、ということは私にとって非常に重要なことであり、共同で編者になってくれた植さん、清川さんもやはりそれを重要なことだと考えてくれた。(254-55頁)

先にも見た通り、本書が捉えようとしているのは、狭義の「神話」よりは少し大きなもの、「人々によって特別な意味を持つものとして語り継がれる物語」の成り行きである。その担い手はかつて国家や民族といった単位において想定され、最近では任意のつながりを持つ大小の集団、場合によっては個人レベルにまで縮小しつつあるが、それが常に人間が何かに思い入れていく過程において発達していくということはいつの世にも共通している。その点で「神話」は人間の真剣な部分に訴え掛けるものであるが、一方では物語を話したり聞いたりすることの楽しみの部分——虚構であることにおいて過度な深刻さを負うことから自由でいられる——をも確かに備えている。

この両義性、すなわち虚構としての否定的な側面が広く了解されており、しかも誰もがその魅力については認めざるを得ないということこそ、近現代において「神話」が取るに至ったユニークな立ち位置である。ある物語によって誰かと繋がることは、同時にそれを共有できない人々との間に壁を築くことでもあるが、その物語がフィクションであることについての認識をも共有することができたなら、その壁は一種の生体膜として、われわれをより大きなまとまりの隣り合った器官として共生させることさえ可能であろう。不調を来たしたからといって直ちにその器官を摘出してしまうのが愚かな行為であるのと同じように、われわれは実利に繋がらないからとか事実でないからという理由で物語と縁を切ってしまうことはできない。現代においては、未だ見ぬ「真実」を探求する一方で、過去に見てきた「虚構」や「幻想」にも絶えず想いを致さなければならないのである。

その営為に最終的な解決はなく、要件はただ続けることができるかどうかということである。評者には神話学だけがそうだとするつもりもないし、あらゆる学問よそうあれかしとも思わないが、少なくともこの時代において神話を改めて問うという作業は、われわれがちょうど学問と生活の間に敷いているような区別について改めて思考を巡らせる段階を必ずや伴うであろうと感ぜられる。ともすれば娯楽が楽しみでなくなり、これまで信じられてきたものが偽物じみて見えてくるかも知れない困難な道程の始まりを告げるこの決然たる鎬矢が、しかし不思議に悠々と、軽やかに音を立てながら飛んでいくのを、評者は今この場所にあつてとても頼もしい思いで見上げるのである。

以上、最初に断ったように、ここではあくまで本書に対する評者なりの思いを書かせて頂いた。神話学や物語論に関してはほぼ全くの門外漢であり、書評を執筆する上では敢えてそうした不勉強な自分が持っている程度の関心と興味へこの本はどう応えてくれるかと

いうことを意識しながら読み進めた。人によっては違った疑問が生まれ、違った満足が得られるであろうことは勿論としつつ、最後にそうした視点から認められた幾つかの不満についても述べておきたい。

まず、日ごろ自分が読む同様の本と比較しても、原稿の誤字脱字がそのまま活字になってしまっていると思われる箇所が多さが目につくこと。非常に専門的な事柄を扱っていて、読者のほとんどが文章の言わんとすることに予め精通しているという場合にはともかく、本書はそれ以外の人々をも引き込む十分な射程を有していると思われるだけに、こうした所で読者の理解が妨げられるのはいかにも勿体ないことである。もう一つには、第1部から第2部までの各論が時代的にも地域的にも相互にかなり密接に結び付いている分、第3部での広がりようが相対的にどこか脈絡のないものに感じられてくること。上述の通り、その飛躍的な広がり自体が意味するところこそ本書の示唆するかなり重要な問題であると評者は考えているが、こうした読みを促進するにせよ修正させるにせよ、第3部で「神話」の今日的意義を説くにあたって、例えば本書における「今日」の捉え方といった前提をいちど確認しておく必要はなかったか。

とはいえ、今こうしている間にも、過去と現在、史実と虚構は様々に新たな形を取って結び合っている。本稿の修正作業中にはどこかで行われている聖杯を巡る戦いに紫式部が参加するというニュースが伝わり、評者の手は困惑のあまり一時止まることになった。こういう事態をすんなり受け入れて楽しむことができる人々に、誤字や脈絡の心配はあるいは無用であるのかも知れない。そしてこうした混沌へ果敢に立ち向かっていく執筆者たちに、評者はやはりそれ自体、ほとんど物語の英雄に対するのと同じような敬意を改めて抱かずにはおれない。